

2023年2月19日 半田朝礼拝

午前 10時30分

司会 牧之瀬俊彦

奏楽 鬼頭容子

前 奏

招 詞 イザヤ書 第63章8節

讃美歌 讃美歌 21-151-1 (主をほめたたえよ)

交 読 詩編第84篇 (讃美歌 21 p. 93)

祈 禱

聖 書 ローマの信徒への手紙 第8章 12~18節
(新約 p. 284)

讃美歌 讃美歌 21-57-1 (ガリラヤの風かおる丘で)

説 教 「父と呼ぶ」

今日の聖書箇所、ローマの信徒への手紙第8章15節に「わたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」とあります。このローマの信徒への手紙は、第3章からずっと細かく、パウロの手

紙の中では一番細かく、イエスさまが何をなさったかということについて記しています。そしてこの第8章は、救いについて語っている最後の部分でして、次の第9章からは、新しい部分に入ります。つまり、主イエス・キリストの救いについての急所を、信仰によって義とされることだとか、死からの甦りであるとか、解き明かしてきました。その最後に近くなって「わたしたちは『アッバ、父よ』と呼ぶのです」と書きました。ですからわたしたちの信仰は、神さまを自分の父と呼ぶことができるようになることだということになります。しかもこの「アッバ」という言葉は、もともとは赤ちゃんがお父さんと呼ぶ言葉でした。今ですと、「パパ」と呼ばせるところかもしれません。ですから、子どもがお父さんを「アッバ、アッバ」と呼ぶとしたのです。ついでにお母さんのことを何と呼んだかということ「イマ」と呼んだ。「アッバ」という言葉も「イマ」という言葉も、どちらも赤ちゃんが一番発音しやすい言葉だと分かります。本当の乳飲み子が小さな子どもが言葉にすることができるような父を、お父さんと呼ぶ言葉が、ここに記されています。

この言葉は何も難しい言葉ではありません。誰でも言えるような呼びかたで「アツバ」と呼びます。この言葉だということは、相手が神さまだからうやうやしく、他の父親などには使うことができないような言葉で呼ばなければいけないという規則は何もありません。「アツバ」と呼べばいいということです。

もっともこれは、決していつまでも幼児言葉であったわけではないようです。やがて大人になった子どもたちが、それでもやっぱり自分のお父さんのことを「アツバ」と呼んだそうです。丁度それは、今も大人になった子どもたちが結婚したり、一人前になった後でも、自分の父母を「パパ、ママ」と呼ぶのと似ているかもしれません。ただ、とても大事なことは、そんなふうに、神さまのことを「アツバ」と呼んだのは、これは、イエスさまが初めてだということです。神さまのことを「アツバ」と子どもの心で、子どもの言葉で呼んでおられるのは、イエスさまだけで、イエスさまだけが、その祈りのなかで「アツバ」、「お父さん」、そう呼んで祈りをされた。そしてその

祈りをわたしたちに教えてくださいました。それが主の祈りです。ですから、この「アッバ、父よ」というパウロの言葉も、主の祈りのことを考えて書かれたのかもしれないと推測する人もあるようです。「天にいます我らの父よ」。わたしたちが日曜日ごとの、あるいは日毎の祈りの中で、繰り返し、子どもでさえも唱えることのできる主の祈りがここに記されている。いわば、わたしたちの救いは、イエスさまが教えて下さった主の祈りにぎゅっと詰まっていると考えていいと思います。

週報にも載せましたが、同じ詩人の書いたもう一つのとても短い詩があります。

われちちとよぶ

われをよぶこえもあり

そのこえのふところよりながむれば

きりすとの奇蹟のやすやすとありがたさ

わたしには詩を注釈する能力はありませんが、それでも

このとても短い詩の中にある、ある言葉に魅かれます。それはこの詩人が神さまに対して「父よ」と呼んでいるのですが、けれどそれだけではありません。自分が神さまに向かって「父よ」と呼びかけている時、あるいはそれよりも既に先に、自分を呼んでいる声があると歌っています。きっと「わが子よ」と呼んでくださる声が聞こえてくるのでしょう。「父よ」と呼びかけ、「わが子よ」と応えて下さる一対一の生きた関係があります。詩人はその声のふところに入り込んでいます。自分の声の懐ではなくて、自分を「わが子よ」と呼んでくださるその声の懐に飛び込んでしまうと、キリストの奇蹟がやすやすと、容易に、簡単に、分かるのだ。今まで分からない、信じられないと思った奇蹟の真相が見えてくると歌っています。そしてそれがありがたいことだと思っています。神さまはわたしたち人間の有り様と無関係に、どこか遠いこの世界の果てに眠っておられるのではなくて、わたしたちが「ふところ」にはいり込めるほどの近さにおられる。そしてその「ふところ」から物事を眺めることを願っておられるのだ。

使徒パウロがここで語るのも、そのキリストの奇蹟です。13節にこうあります。「肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を断つならば、あなたがたは生きます」。「肉に従って生きる」とは、肉の思いに従って生きるということ、つまり、神さまを知らない思い、あるいは神を否定する思いに生きるということでしょう。それはちょうど、放蕩息子が父親のもとを離れ、何もかも使い果たしてしまったときに、彼のいのちを支える「食べ物をくれる人は誰もいなかった」、死を待つしかない息子の姿と重なります。けれど、我に返った息子が帰るべきところに帰るその姿と、そして父親のもとに帰る息子を待ち続け、戻って来た息子について父親が言った言葉、「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」と言われた、それこそがキリストの奇蹟ではないのか。たとえばそれは、今日の聖書箇所ですぐ前にある11節に「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊

によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう」とあります。そのことです。

そして、先ほども申しましたが、神の子イエスだけが本当は神を呼ぶことができた、「アッバ」、「お父さん」という言葉で遠慮しないで、わたしたちもまた神さまを呼ぶことができるようになる。それはどうしてか。15節に「神の子とする霊を受けた」という言葉が出てきます。少しわかりにくい表現ですが、分かりやすく言いますと、わたしたちを神さまの養子にしてくださいという意味です。「養子にする」という言葉がここで使われています。つまり、わたしたちが神さまの子であるというのは生まれながらではないのです。わたしたちは神さまの子どもとして産んでいただいたのではなくて、造られた。これは主イエス・キリストとの違いです。主イエス・キリストは神から生まれた、ご自身もまた神の子です。そしてわたしたちは、その主イエス・キリストを信じ、主イエス・キリストと一緒になったときに、神さまの子どもになる。それは、イエスさまが

長兄としてわたしたちの兄弟になってくださる。そしてわたしたちは、イエスさまから見れば、弟妹になるということです。もっと言えば、神さまの養子になるのです。

わたしたちが祈るということ、祈るべき相手、呼びかける相手がいるということ、そしてそれに先立って「わが子よ」と呼びかけてくださる方がいるということ、これは、とても素晴らしい宝物です。わたしたちが神さまを父と呼ぶことができる、その祈りを知っている、覚えているということは、わたしたちが神さまの子どもであり、イエスさまと同じ神さまの子どもとしての身分を与えられた、そのように振る舞うことが許されたということです。わたしたちはそのことといつも、はっきりさせておきたいと思いますから、お祈りをするときには、この教会でもまず「主イエス・キリストの父なる神さま」と呼び始めます。これは、「主イエス・キリストの父なる神さまであられるのですから、わたしたちの父でもあられる神さま」という意味です。あるいはまた、礼拝が終わる時に、祝祷をいたしま

す。気づいておられるかと思いますが、「主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の交わり」という順序になっています。どうして神さまの愛が先に来ないのか、神、キリスト、聖霊という順序にどうしてならないのかという疑問もあるかもしれません。そういう順序の祝祷もありますが、コリントの信徒への手紙第二の第 13 章 13 節に基づく祝祷は、主イエス・キリストの恵みが軸になっています。イエスさまの恵みをわたしたちがよくわきまえた時に、神さまの父としての愛が分かるようになったということを明らかに示していると思います。わたしたちの神の子としての父なる神さまとの交わりは、いつでも主イエス・キリストを軸にして動いていますし、それによって生かされているものです。神さまは初めから主イエス・キリストの父であられた。だからこそ、わたしたちの父となってくださいました。

ですから、わたしたちが、あるいは信仰の先輩たちが、神さまのとても優しいなさり方を見ていて、「ああ、これはわた

したちの父親に似ているな」と思って、神を「父」と呼ぶようになったのではありません。たしかにわたしたちが父なる神さまを思う時、ほぼ間違いなく自分が感じている父としてのイメージを重ね合わせているだろうと思います。けれどももしそれが正しいとすれば、わたしたちの父親のイメージはどんなイメージでしょうか。わたしたちの父親は、あるいは母親でもいいのですが、およそ親に対するイメージは理想的なものばかりではありません。もしかすると、父親に対するイメージが辛く悲しいとしたら、とても「父なる神さま」とは呼びかけられなくなってしまふことだってあります。ここで一番大切なこと、忘れてはいけないことは、わたしたちの「父」のイメージではなく、神さまを「アッバ」「父よ」「お父さん」と呼ばれた、イエスさまにとっての「父」「お父さん」のイメージです。イエスさまにとっての父、お父さんはどんな存在なのか。そのイメージこそが、「父なる神さま」「天におられるお父さま」と唱える時に、必要なイメージだろうと思います。聖書からぜひ、捜していただきたいと思いますが、少し紹介しますと、たとえば「だ

から、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言
って、思い悩むな、それはみな、異邦人が切に求めているもの
だ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに
必要なことをご存知である」(マタイ 6:31-32)、「あなたがた
の天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値
あるものではないか」(マタイ 6:18)、「わたしの父の家には住
む所がたくさんある」(ヨハネ 14:2)、「父がわたしを愛された
ように、わたしもあなたがたを愛してきた」(ヨハネ 15:9)。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わ
たしにつながっていなさい。・・・実を結ぶものはみな、いよいよ
豊かに実を結ぶように手入れをなさる」(ヨハネ 15:1-
2)。まだまだ沢山あります。こうした言葉はどれもイエスさま
が、この父なる神さまをわたしたちに紹介して下さっている言
葉ばかりです。その意味では、イエスさまがわたしたちのとこ
ろに来てくださったのも、父なる神をわたしたちに紹介するた
めですし、またそのようにして、わたしたちの兄弟になってく
ださるためのものでした。この主イエス・キリストを見ていれ

ば、この主イエス・キリストと深くつながっていれば、わたしたちは神さまとの交わりを絶やすことなく生きることができるのです。

そうした父なる神について知るわたしたちですが、さらに父なる神についての経験を重ねることは許されるだろうと思います。先々週、トルコで大きな地震がありました。ウクライナへのロシアの侵攻も一年になろうとしています。今回多くの方が亡くなり、今も行方不明の方々が大量におられ救援活動が続きます。自然災害によって多くの命が失われました。ではそうしたなかで、なおもわたしたちは神さまを父と呼ぶことができるのかという問いが出てくるだろうと思います。けれどこの問いは、わたしたちは答えることの出来ない問いです。ただわかっていることは、その時に、なおも主イエス・キリストがおられ、そして「けれどもこの神は、あなたがたの父なのだ」と言い続けておられる言葉に、耳を傾けるかどうかということが、わたしたちに問われていると思います。そうでなければ、

パウロがこの後 18 節以下で更に苦しみについて語りながら、なおその苦しみの中での望みを語っていることの意味が分からなくなるからです。23 節から 25 節までを読みます。

わたしたちがまだ見ていないことをどうして待ち望むことができるのか。キリストは見ておられるからです。イエスさまご自身が見ておられるのは、神の子とされること、からだまで贖われて神さまの子どもとなるのだということを、あらゆる疑いに逆らうようにして、イエスさまはわたしたちに語りかけられるからです。もしかするとわたしたちは、詩編やイザヤ書の祈りのような祈りをするかもしれません。「あなたのたぎる思いと憐れみは 抑えられていて、わたしに示されません」(63:15)。どうしてあなたはわたしたちを今ここで救ってくださらないのですか。「それでもなお、主よ、あなたは御自分を抑え 黙して、わたしたちを苦しめられるのですか」(64:11)。ここにある言葉は、ちょうど親の懐にしっかりとしがみつきながら、その胸をゆさぶって、呻き泣いている子どものような言葉で

す。けれど、そう言いつつ、イザヤは「あなたはわたしたちの父です。アブラハムがわたしたちを見知らず イスラエルがわたしたちを認めなくても 主よ、あなたはわたしたちの父です」(63:16)、「しかし、主よ、あなたはわれらの父」(64:7)と叫びます。あらゆる現実逆天に逆らって、「それでも、あなたはわたしたちの父です」と言えるのです。

その時「わたしたちは決して孤独ではない」とパウロは言います。今日の聖書箇所ではパウロは主イエス・キリストについて直接にはほとんど語っていません。聖霊について語っています。先ほど祝祷の話をいたしました、祝祷の最後に「聖霊の交わり」と言います。「聖霊との交わりがあなたが一同と共にあるように」と言います。「聖霊の交わり」、分かりにくい言葉です。ただ、この聖霊の交わりの一つの意味をはっきりさせているのが、15節と16節にあります。「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは『アッバ、父よ』と呼ぶ

のです。この霊こそは、わたしたちが神の子どもであることを、わたしたちの霊と一緒にあって証ししていただきます」。この聖霊の働きを26節ではこう言い換えています。「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けていただきます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです」。この26節と15節、16節を結びつけるとこうなると思います。どう祈っていいか分からない。「アッバ、父よ」という言葉さえ出なくなる時がある。どうしてここで神さまを父と呼ぶことができるのか。神さまのお姿が見えない。神さまのなさることが分からない、信じることができない。そう言って呻くしかないときがある。「アッバ」という言葉も出て来なくなる。自分の声と言えば、呻く声でしかない。けれど、その声を祈りの言葉に変えて下さるために、聖霊は高いところからその苦しみを眺める、見下ろすのではなく、わたしたちのその苦しみを共に苦しむ主イエス・キリストとして、わたしたちと一緒にいてくださる。父なる神から送られた霊として、わたしたちと共にいてくださり、そして

わたしたちにもう一度、「父なる神さま」という言葉を教えて下さるのだ。その霊をパウロは「神の子とする霊」と呼びます。

「あなたがたの霊は孤独ではない。あなたがたの霊と一緒に神の霊があるではないか。その神の霊こそが、わたしたちが神の子どもであることを証ししてくれるではないか。だから『アッバ、父よ』と呼ぼう」。祈ります。

教会のかしらであり、主イエス・キリストの父なる神さま。あなたが主イエスの父であられるだけでなく、それだからこそ、わたしたちの父となっていてくださること、父よと呼ぶことを与えて下さり、感謝いたします。どうか力尽きそうになる時も、うろたえて進むべき道を見失う時にも、聖霊によっていつも恵みを思い起し、あなたに向けて歩むことができますように。誰でも言うことのできる言葉、けれどあなたが教えて下さらなければ語ることができない「アッバ、父よ」との呼びかけを、どうか与え続けてくださいますように。とりわけ、あなたからの呼びかけを必要とする者に近く語りかけてくださいま

すように。感謝と願いを主イエス・キリストのみ名によって祈ります。
アーメン

讃美歌 讃美歌 21-12-3 (とうときわが神よ)

献 金 讃美歌 21-65-2

報 告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>